

逆に向って

富田 惣七

自然科学についての仕事は、学問としての仕事であります、やはりこれは一つの学問という塔の中にひきこもって、社会科学とは別々な途の上にたっている様な状態ではいけないということを、現代は要求しているのではないのでしょうか。

人間が自分らの手や頭で作りあげながら、その社会のしくみの要求から、自然をはなはだしくこわし、けがし、している事について、梅棹忠夫、加藤秀俊、川添登、小松左京、林雄二郎などの各氏の仲間で“未来学の提唱”というアピールがなされた事はご存じの通りであります。

その例をとるまでもなく、もはや私たちの周囲は、自然破壊と、あらゆる汚濁の問題で一ぱいあります。これらの発言をみて感じられることは、自然科学の仕事に従事している人達が、もっと先頭にたって、その観点から、植物や動物を眺め、社会にアピールするという活動が起るべきではないかということです。

一般の人々の気がつかない、いろいろな場面での、植物や動物に起っている恐るべき出来事、そしてそれが、とりもなおさず私たち自身の生命の将来と深いつながりをもっているという事実を、みんなの前に、具体的に示す仕事、そういう仕事をもっと強く起ってよいのではなからうかと思えます。

むしろ、そういう仕事自体が本体となってゆくべき事を、現代は自然科学に期待しているのではないのでしょうか。

集中的に、自然科学の領域で仕事をしている人達が、この問題にとりくみ、それを結集した場合、それは何にもまさる人類への警告となると思えます。

未来学の人々の中には、すでに地球は、もはやとりかえしのつかないところまで来てしまった、という意見をもった人もありますが、それ程に自然を省りみなくなった現代の人間達に、この驚くべき事実を、具体的な例を示して、目のあたり見せてやる事の出来るのは、自然科学の仕事に従っている人達の外にはありません。

学問として純粋に一つの分野の中にあるという事も大切ですが、それが生きた働きをもつためには、この決定的に切実で重大な問題を、具体的に示すことによって人々を啓蒙し、むしろ“原始への回帰”を求める声さえあがってくる様な力をもつようになったとき、自然科学は本当に人類を救う学問になるのではないかと思います。

われわれを、余りに便利になれさせすぎた文明の流れを、逆流させる一つの新しい流れ、未来に向う科学としての流れを作り出す、それが博物学のもつ今日の課題ではないかと思えます。

(福井高等学校)